

萩原鐮太郎の思想に関するテキストマイニング分析

—一家団欒と女性の自立を中心に—

○ 東京福祉大学 萩野基行 (005591)

キーワード：碓氷社・製糸・家庭

1. 研究目的

1885 (明治 18) 年に碓氷社の社長となった萩原鐮太郎 (以下、萩原と記す) は碓氷社を、解散の危機から復興させ、明治後期にはわが国を代表する組合製糸へと発展させていった。

萩原に関する先行研究は、春日 (1974・1976)、宮澤 (1988)、高山 (1989)、木嶋 (1997)、杉本 (2006)、大野 (2007) などがあり、その中には萩原が、「一家団欒」や「家庭の幸福」の重要性を唱えたことに関する研究や、女性の自立に対する思想を中心とした研究がある。

思想研究については吉田 (1994) が、「とにかく自己の恣意的解釈に流れがちである」と述べ、藤井ら (2005) が質的研究の問題点として、「分類結果が研究者の解釈によって異なるという信頼性の問題」を指摘しているように、人間の思想に関する研究或いは史料分析は、研究する人の考え方に影響するところが少なくなく、客観性が乏しくなりやすいと考える。

そこで本研究では、萩原の考えが示されている講和記録を中心に、テキストマイニングを用いて分析する。そして萩原の「一家団欒」や「家庭の幸福」に対する考え方、並びに、碓氷社の工女や教婦など、女性に対する考え方を構造化し、考察することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究の対象は碓氷社の工女や彼女らを教える教婦など、女性に対する萩原の考えが記された文献とした。具体的には、『社業談』(1910) から①「自家に於て製糸に適良なる繭を収め之れを以て製糸を行ふこと」、『社報第 2 号』(1911) から②「女子の本務」、『社報第 19 号』(1913) から③「教婦の心得」、『社報第 24 号』(1914) から④「繰糸上の心得」、『社報第 25 号』(1914) から⑤「第五回教婦講習会開催に際して講習員諸氏に告ぐ」、『社業余談』(1916) から⑥「教婦の心得四ヶ条」と、⑦「当社組織の本領と女子の境遇」である。

上記の文献を、樋口が開発した KH Coder を使用したテキストマイニングを実施して、頻出語リストの抽出と階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針」を遵守する。なお、参考・引用文献の出典については、当日明示する。

4. 研究結果

出現回数が最多なのは「女子」と「製糸」の114回、次いで「人」(102回)、「諸氏」(89回)であった。上位5つの抽出語の特徴として、「製糸」以外は人に関する語であった。また、強制抽出した「一家団欒」の出現回数は21回、「家庭の幸福」は3回と少なかった。

続いて出現回数20回以上の語の階層的クラスター分析を行った結果、8つのクラスターに分類された。これらを順に①「結婚生活」②「女性の責任」③「文明生活と自己」④「幸福を得る」⑤「碓氷社の組織と事業」⑥「工女・教婦の熟練技術」⑦「碓氷社時間」⑧「萩原の思い」と名づけた。次にこれらを類型化し、第1クラスターから第4クラスターを「生活」、第5クラスターから第7クラスターを「勤労」、第8クラスターを「思想」とした。

次いで出現頻度20回以上の語で共起ネットワーク分析を行った結果10のカテゴリーに、分類された。この中で、「当社」「社会」「諸氏」「益々」「組織」が多くの語と繋がっていた。

5. 考察

頻出語リストの上位5つは、「女子」「人」「諸氏」「工女」など人間に関するキーワードが多かった。またクラスター分析の結果は、「生活」「勤労」「思想」というカテゴリーに分類できた。碓氷社の製糸方法は明治期までは改良座繰製糸が主流であったが、この碓氷社における座繰製糸は家族労働のために行われていたと捉えられる。そこでは生活と勤労が密接しており工女であり婦人である女性は両者の中心的存在であると萩原は認識していた。このようなことから萩原は、「女子」「工女」「教婦」「婦人」という語を多用したと考える。

また共起ネットワークの分析結果の中で、「社会」が「今日」「女子」「立つ」「一家団欒」「益々」と繋がっていた。そして「立つ」は「夫」「責任」「一家」「婦人」と繋がっていた。前者は現代社会における女子の自立と一家団欒の重要性を訴え、後者は、婦人は夫と共に一家を背負って立つ責任があるとの思想の表れだと考える。一方、別のところでは、「家庭」「姑」「嫁」「行く」が独立して繋がっていた。これは姑のいる家庭に嫁にいくと捉えられる。しかし女性が嫁いでいっても、所謂嫁姑問題で一方向的に去り状をつきつけられる現状や三従七去の教えがあることに、萩原は女性(嫁)の立場を憂えた。また碓氷社は養蚕農家における家族労働を基本としていたため、嫁姑といった家庭問題にも言及したと考える。

最後に、多くの先行研究で重視された「一家団欒」は、共起ネットワーク分析の結果では「社会」「文明」「人生」と繋がっており、「人生」は「金力」と繋がっていた。またクラスター分析の結果でも、「一家団欒」と「文明」は隣接していた。文明開化とともに貨幣経済が浸透していった明治期、人生最上の快樂である一家団欒は金がなくてはなしえなくなり、文明によって破壊されていると萩原は指摘した。しかし碓氷社では、「一家団欒を基礎として工女の品性を優美に、精神的に働かしめ」ることで、「当社の製糸が益々精良となり」、高価になると述べている。つまり萩原は貨幣経済による一家団欒の破壊を非難する一方で、一家団欒を基に女性が主体的に自立して働くことで良い糸ができ、収入を得ることができると述べ、「家庭の幸福」と収益を併せ得られる碓氷社のシステムを誇ったのであった。